

ON-PAM ANNUAL REPORT 2023



舞台芸術制作者オープンネットワーク
Open Network for Performing Arts Management

はじめに

本レポートは2023年に実施したON-PAMの活動を記録し発行するものです。2023年を振り返ると、国内では新型コロナウイルスが5類に引き下げられ、活動の範囲や形式が変化していく時期でした。また、10月にはインボイス制度がはじまり、特にフリーランスとして働く人が多い舞台芸術業界でも注目され、ON-PAMでも契約書の記載方法や条件交渉について学ぶ機会もつくってきました。国外では、10月にパレスチナ自治区ガザにてイスラエルとハマスの衝突が激化し、2026年現在も多くの人が犠牲になっています。

このように社会が変化する中、ON-PAMの活動は前年から続くオンライン講座事業「舞台芸術の『関係性』をめぐる連続講座2022～持続可能な創造環境に向けて」からスタート。また、同事業の第3弾となる「舞台芸術の『未来』をのぞむ連続講座2023～持続可能な創造環境に向けて」を秋から実施しました。3年かけて行った本企画はオンライン講座として様々なジャンルから講師を招き、多様な論点を扱ってきました。コロナ禍が収束し、個々の活動を再開するにあたって、新しい視点を提供できる講座になっていることを期待します。

新しい試みとしては、「Next Producers Meeting」(NPM)のなかで、「共創するアートマネージャーとアーティストのための『Co-Creation Camp』」(CCC)というプログラムをはじめ、公演や作品創作プロセスの中で協働するアートマネージャー(制作)とアーティスト(演出家や脚本家)のチームを対象とした学びとディスカッションの機会を東京、豊岡で実施しました。コロナ禍において創作や発表の機会が制限されていた時期を経て、改めてカンパニーの作り方や出会い直しをするような会となり、ON-PAMとしても発見の多い企画でした。

ON-PAM政策提言調査室では3月にオンライン勉強会を開き、文化行政について学び、自治体へのアドボカシーの可能性について話し合いました。9月には豊岡演劇祭との連携プログラムとして、これからの国際交流を考えるトークを開催。ON-PAM委員会は12月のYPAM期間中に実施しましたが、海外からのゲストはまだ少なかったため、オンラインにてアジアのネットワークや国際交流事業についての話し合いをゲストスピーカーを招いて実施しました。国内向けのプログラムは、オフラインで開催し、秋田、長野、沖縄からゲストを招き「ON-PAM 委員会 2023 @YPAM シンポジウム:自治の場として考える劇場／アートセンター」を行いました。コミュニティにおける芸術文化のあり方を考える時に、劇場／アートセンターをベースに様々なステークホルダーと関わり、地域の人々が文化政策を当事者として捉え、意思決定に参画できるような仕組み作りに

についてお話を聞きました。

その他、会員提案企画では、「おしゃべり会for地方制作者」「『文化多様性条約』グローバル・レポートを読む会」「松波&寺田の海外フェスティバルおしゃべり会」が開催され、オンラインの企画からオフラインの企画もはじまった年でした。

外部から受託した事業としては、アーツカウンシル東京「芸術文化創造活動の担い手のためのキャパシティビルディング講座」「芸術文化創造活動の担い手のための会計・税務講座」、早稲田大学演劇博物館「ドーナツ・プロジェクト2023 実践編」、文化庁芸術家等実務研修会「関係づくりを学ぶ!現場で使える契約講座」を実施しました。このような事業を通じて、ノウハウの蓄積や、情報交換、専門家とのネットワーク、活動基盤の安定化をはかる一助となり、翌年以降につなげていけるよう取り組みました。

気候変動、物価高、資源の問題、紛争・戦争など世界的な状況・課題に向き合い「国際交流」ということを改めて考える一年でもありました。舞台芸術の活動を通じてどのように社会と向き合い表現を止めないようあり続けるか、一人で考えずに多くの人と共に考え、思考できるネットワークを目指していきたいと思います。

最後に、本アニュアルレポートに係る執筆・編集作業にご協力いただきました皆様、2023年の活動に参画くださいました会員の皆様に心よりお礼申し上げます。

2026年8月 舞台芸術制作者オープンネットワーク事務局長 塚口 麻里子

目次

事業概要	2023年度 事業一覧	05
レポート	会員提案企画	12
	おしゃべり会for地方制作者	13
	松波&寺田の海外フェスティバルおしゃべり会	15
	第1回 政策提言調査室勉強会フリーディスカッション「行政との関係を考える」	16
	共創するアートマネージャーとアーティストのための「Co-Creation Camp」 by Next Producers Meeting	19
	公開セッション〈Camp-1〉	20
	公開セッション〈Camp-2〉 最終公開プレゼンテーション「わたしたちの共創計画」	26
	Next Producers Meeting in 豊岡2023	29
	ON-PAM 委員会 2023 @YPAM「オープン・ディスカッション」	33
	オンラインセッション： Talking about producers' network in Asia – Focus on the case of APP	34
	オンラインセッション： 舞台作品を海外(国外)で上演すること、海外(国外)から招聘することについて	36
	シンポジウム： 自治の場として考える劇場／アートセンター	38
	ラウンドテーブル： Next Producers Meeting 2023 in 横浜	42
	舞台芸術の「未来」をのぞむ連続講座2023～持続可能な創造環境に向けて	44
	執筆者一覧	46

2023年度 事業一覧

事業名	舞台芸術の「関係性」をめぐる連続講座2022～持続可能な創造環境に向けて 第3回 ハラスメント編				
日程	1月6日(金) 19:00～21:30	参加人数	148名	会場	オンライン(Zoom)
概要	2022年4月からいわゆるパワハラ防止法が中小企業にも義務化される一方で、舞台芸術界で起こるハラスメントに対して、より適切な対応をとる必要性が高まっている。ハラスメントの構造やパワハラの類型をはじめ、被害者の心理、被害者対応、加害者にならないための意識、主催者としての責任など、ハラスメントに関して基本から理解し、その防止に活かすことを目指す。 講師：高山直子				
事業名	舞台芸術の「関係性」をめぐる連続講座2022～持続可能な創造環境に向けて 第4回 文化権と法律編				
日程	1月26日(木) 19:00～21:30	参加人数	40名	会場	オンライン(Zoom)
概要	日本国憲法第二十五条「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」を基点として、表現の自由と共に誰もが芸術文化について「参加」「享受」「創造」することのできる重要性について学び、公立劇場等の現場での実情もふまえ、文化権と芸術文化に関する基本法、文化政策のつながりについても考える。 講師：中村美帆 スピーカー：岸正人				
事業名	舞台芸術の「関係性」をめぐる連続講座2022～持続可能な創造環境に向けて 第5回 ジェンダー編[2] ジェンダーバランスについて				
日程	2月13日(月) 19:00～21:30	参加人数	41名	会場	オンライン(Zoom)
概要	表現の現場調査団による「ジェンダーバランス白書2022」が8月に発表され、表現の分野でのジェンダーバランスの不均衡が浮き彫りになった。その背景にある歴史的な経緯と社会的な構造をとらえつつ、無意識のジェンダーバイアス、同質性、権力勾配、ハラスメントとの関係を見据え、機会の平等性等について考える。 講師：田中東子 スピーカー：森本ひかる、端田新菜				
事業名	舞台芸術の「関係性」をめぐる連続講座2022～持続可能な創造環境に向けて 第6回 インクルージョン編				
日程	2月22日(水) 19:00～21:30	参加人数	40名	会場	オンライン(Zoom)
概要	創作や鑑賞の場における「社会包摂」のありようと、その根本を見直す。最前線での知見を得ながら現実にかけているギャップをつかみ、「芸術の質」と共にどのような目標が有効かを考える。あらゆる人にひらかれてゆく「生きるための芸術」を土台に、表現の可能性がひろがるような、社会と芸術の関係が想起されることを目指す。 講師：中村美亜 スピーカー：千田優太、森田かずよ、藤原顕太				

事業名	舞台芸術の「関係性」をめぐる連続講座2022～持続可能な創造環境に向けて 第7回 アップデート特別編				
日程	3月9日(木) 19:00～21:30	参加人数	35名	会場	オンライン(Zoom)
概要	「舞台芸術の『契約』にまつわる連続講座2021」での、基礎編、労働環境編、権利編、事業委託編、著作権編、税務・会計編について、新たな情報を持ち寄り、アップデート。さらに、2022年度の当連続講座を振り返り、テーマ同士の関連性をたどるなど、様々な見地から総合的に考えが交わされる場。 スピーカー：伊藤達哉、坂本もも、武田知也、藤原顕太、古元道広、矢作勝義				
事業名	第1回 政策提言調査室勉強会 フリーディスカッション「行政との関係を考える」				
日程	3月22日(水) 19:30～21:30	参加人数	13名	会場	オンライン(Zoom)
概要	政府や地方自治体の関連組織のメンバーとして、またこれら公的セクターと一緒に仕事をするなかで、みなさんが日頃感じている疑問や問題点を話しあう場。この議論を通して、公的セクターとの関係において問題の本質は何かについて共通理解を目指す。また、それをふまえ、公的セクターとの間の信頼関係を増進し、舞台制作環境の向上等アート・マネジメントの質的向上に向けた政策提言をとりまとめる。 コーディネーター：野田邦弘				
事業名	共創するアートマネージャーとアーティストのための「Co-Creation Camp」 by Next Producers Meeting 公開セッション〈Camp-1〉				
日程	7月14日(金) 14:00～16:00	参加人数	—	会場	YAU STUDIO(東京都)
概要	レクチャー「誤解なき『心理的安全性』と『チームの多様性』のためのレクチャー」 講師：植松侑子 ワークショップ「他人に目標を立ててもらう『タニモク』」 ファシリテーター：谷陽歩				
事業名	共創するアートマネージャーとアーティストのための「Co-Creation Camp」 by Next Producers Meeting 公開セッション〈Camp-1〉				
日程	7月15日(土) 10:30～12:30／13:30～15:30	参加人数	—	会場	YAU STUDIO(東京都)
概要	ワークショップ「アートマネージャーの視野・視点をケーススタディーする」 ファシリテーター：坂本もも ディスカッション「アーティストの視野・視点をケーススタディーする」 ゲストスピーカー：カゲヤマ气象台・日和下駄(円盤に乗る派)、小野彩加 中澤陽 スペースノットブランク、橋本清・山崎健太(y/n)				

事業名	共創するアートマネージャーとアーティストのための「Co-Creation Camp」 by Next Producers Meeting 公開セッション〈Camp-1〉				
日程	7月16日(日) 11:00～12:00	参加人数	—	会場	YAU STUDIO(東京都)
概要	1、2日目のインプットをふまえ、自身のチームについて短いプレゼンテーション(ライトニングトーク)を実施。 登壇者: 〈チーム白昼夢〉大蔵麻月、石坂雷雨、米山昂 〈チーム譜面絵画〉大川あやの、河崎正太郎、三橋亮太				
事業名	豊岡演劇祭2023 連携プログラム Next Producers Meeting in 豊岡				
日程	9月16日(土) 11:00～13:00	参加人数	19名	会場	まちの基地アンテナ(兵庫県)
概要	・トークセッション 国際交流事業や海外とのネットワーキングに尽力されているアートマネージャーをゲストスピーカーに招き、 これからの国際交流を考える。 ゲストスピーカー: 目澤美裕子、新田幸生 ・ラウンドテーブル				
事業名	共創するアートマネージャーとアーティストのための「Co-Creation Camp」 by Next Producers Meeting 公開セッション〈Camp-2〉				
日程	9月18日(月) 11:00～12:30	参加人数	26名	会場	まちの基地アンテナ(兵庫県)
概要	最終公開プレゼンテーション「わたしたちの共創計画」 これまでのプログラムを体験した気づきや学びをもとに、今後の「共創計画」をチームとして発表。 登壇者: 〈チーム白昼夢〉大蔵麻月、石坂雷雨 〈チーム譜面絵画〉大川あやの、河崎正太郎、三橋亮太				
事業名	会員提案企画 おしゃべり会 for 地方制作者①				
日程	10月20日(金) 21:00～23:00	参加人数	14名	会場	オンライン(Zoom)
概要	「地方で舞台芸術分野の制作者としてお仕事をしている方」に特化したおしゃべり会 発起人: 伊藤美笑子				
事業名	舞台芸術の「未来」をのぞむ連続講座2023～持続可能な創造環境に向けて 第1回 老いと舞台表現				
日程	10月23日(月) 19:00～21:30	参加人数	38名	会場	オンライン(Zoom)
概要	以前より日本では、高齢者が舞台に立つことは特別ではなかった。時にネガティブな印象を持たれていた「老い」が、人口の1/4が高齢者という社会で当たり前のことになっている。思想や感情などを表すこと、また、それが形として表れる「表現」に年齢は関係なく、一生を通じたものであり、その人らしさ＝個性に強く結びついている。老いてからの自由にも焦点を当て、演劇と舞踊それぞれから社会と舞台芸術における「老い」をポジティブに、豊かなものとしてとらえてみる。 講師: 菅原直樹、中島那奈子				

事業名	会員提案企画『文化多様性条約』グローバル・レポートを読む会(オンライン)①				
日程	11月16日(木) 19:30~21:30	参加人数	18名	会場	オンライン(Zoom)
概要	第1回セミナー「文化的表現の多様性の保護及び促進に関する条約～批准国の文化政策への視点」 スピーカー：坪井ひろ子 発起人：西山葉子				
事業名	舞台芸術の「未来」をのぞむ連続講座2023～持続可能な創造環境に向けて 第2回 舞台芸術と遊び				
日程	11月20日(月) 19:00~21:30	参加人数	31名	会場	オンライン(Zoom)
概要	日本にまだ「芸術」という言葉のなかったころ、平安時代に使われていたのは「あそび」という言葉だった。その典型である「遊宴」は、日常とは別の世界で、他人と共に世界と自己とを体験するための仕掛けと考えられる。なぜ「遊び」は芸術から切り離されてしまったのか。そもそも「遊び」が持っている意義とは？ 世代や時代を超えて、創造の源ともいえる遊びと舞台芸術の関係を解き明かしていく。 講師：尼ヶ崎彬 スピーカー：額田大志				
事業名	会員提案企画 おしゃべり会 for 地方制作者②				
日程	12月6日(水) 21:00~23:00	参加人数	15名	会場	オンライン(Zoom)
概要	「地方で舞台芸術分野の制作者としてお仕事をされている方」に特化したおしゃべり会 発起人：伊藤美笑子				
事業名	ON-PAM 委員会 2023 @YPAM「オープン・ディスカッション」 オンラインセッション：Talking about producers' network in Asia – Focus on the case of APP				
日程	12月6日(水) 11:00~12:30	参加人数	14名	会場	オンライン(Swapcard)
概要	2014年アジアで国際的な活動をするインディペンデント・プロデューサーが中心となりはじまったAPP (Asian Producers' Platform)。これまで開催された7回のキャンプに参加したアジアの制作者／プロデューサーは100名を超え、参加者同士の協働プロジェクトや、キャンプ以外の場での行き来や交流が続いている。これまでAPPが培ってきたネットワークや今後の展望について、参加者、オーガナイザーの立場からゲストを迎えオンライントークを開催。 ゲストスピーカー：Annette Shun Wah、Cui Yin、E-Jan Tan、目澤美裕子 モデレーター：齋藤啓				
事業名	ON-PAM 委員会 2023 @YPAM「オープン・ディスカッション」 オンラインセッション：舞台作品を海外(国外)で上演すること、海外(国外)から招聘することについて				
日程	12月7日(木) 15:00~16:30	参加人数	17名	会場	オンライン(Swapcard)
概要	舞台芸術作品の国際的な行き来に焦点を当て、コロナの影響下にあった期間の変化、そして自分の国や地域以外で新たな観客と出会うことの意味を再考する。 ゲストスピーカー：June Tan、Juliet Knapp モデレーター：齋藤啓				

事業名	ON-PAM 委員会 2023 @YPAM 「オープン・ディスカッション」 シンポジウム：自治の場として考える劇場／アートセンター				
日程	12月12日(火) 18:30～20:30	参加人数	9名(来場者数)	会場	男女共同参画センター横浜南 フォーラム南太田(神奈川県) / オンライン(Swapcard)
概要	舞台芸術と地域社会をつなげる場所である劇場／アートセンターの役割とは何か。国・自治体の文化行政を背景としながら、地域やコミュニティに関わる多様な人々と共有する「自治の場」となりうるのか。劇場／アートセンターを様々な形態や方向に開き、既存のシステムや運営の更新に取り組む実践者をゲストスピーカーとして招き、それぞれの活動からみえてくる可能性について話す。 登壇者：荒井洋文、林立騎、三富章恵 司会：増田愛子				
事業名	ON-PAM 委員会 2023 @YPAM 「オープン・ディスカッション」 ラウンドテーブル：Next Producers Meeting 2023 in 横浜				
日程	12月13日(水) 11:00～11:45	参加人数	11名	会場	男女共同参画センター横浜南 フォーラム南太田(神奈川県)
概要	2023年豊岡演劇祭とON-PAMが共催して実施した「共創するアートマネージャーとアーティストのための『Co-Creation Camp(CCC)』」の振り返りセッション。本ラウンドテーブルでは、プログラム参加者と共に、東京・豊岡でのキャンプから得られたインスピレーションや今後の展望を話す。また、CCC参加者世代の現在地や、次世代のアートマネージャーのネットワーク構築に向けたアイディアや期待、ビジョンを共有する機会とする。 スピーカー：坂本もも、大蔵麻月、大川あやの、河崎正太郎				
事業名	舞台芸術の「未来」をのぞむ連続講座2023～持続可能な創造環境に向けて 第3回 ベイビーシアター				
日程	12月18日(月) 19:00～21:30	参加人数	38名	会場	オンライン(Zoom)
概要	赤ちゃんと共に大人が参加する体験型演劇。様々な事例について発達心理学、脳科学、保育・教育学等を切り口として概説しながら、社会的存在として赤ちゃんに向き合うことが、いかに大切であるかを学ぶ。「自由」な赤ちゃんが無意識に全身で世界を感じ取り、感情や欲求を表すことは、至高のダンスあるいは演劇的な行為であるかのようだ。その限らない好奇心や遊び心は創作及び鑑賞の出発点であり、舞台芸術との関連性についても理解を深める。 講師：浅野泰昌 スピーカー：弓井茉那				
事業名	会員提案企画『文化多様性条約』グローバル・レポートを読む会(オンライン)②				
日程	12月21日(木) 19:30～21:00	参加人数	6名	会場	オンライン(Zoom)
概要	第2回グローバル・レポートを読む① 目標1「文化のための持続可能なガバナンスシステムの支援」(1～4章) 発起人：西山葉子				

事業名	会員提案企画 松波&寺田の海外フェスティバルおしゃべり会				
日程	12月23日(土) 14:00~15:30	参加人数	13名	会場	Camp(東京都) / オンライン(Zoom)
概要	寺田凜、松波春奈ともに2023年度海外へ赴いたため、現地での体験談を話す。 スピーカー、発起人：寺田凜、松波春奈				
事業名	おしゃべり会				
日程	通年	参加人数	—	会場	オンライン(Zoom)
概要	同じ業界で活動する会員同士で、力を抜いて集まってゆるくおしゃべりするオンラインの会。				
事業名	2022年度アーツカウンシル東京 芸術文化創造活動の担い手のためのキャパシティビルディング講座				
日程	1月~3月	参加人数	—	会場	アーツカウンシル東京(東京都)
概要	芸術文化創造活動の担い手のためのキャパシティビルディング講座 ~創造し続けていくために。芸術文化創造活動のための道筋を“磨く”~ 企画運営事務局担当				
事業名	2023年度アーツカウンシル東京 芸術文化創造活動の担い手のためのキャパシティビルディング講座				
日程	9月~12月	参加人数	—	会場	アーツカウンシル東京(東京都)
概要	芸術文化創造活動の担い手のためのキャパシティビルディング講座 ~創造し続けていくために。芸術文化創造活動のための道筋を“磨く”~ 企画運営事務局担当				
事業名	2023年度アーツカウンシル東京 芸術文化創造活動の担い手のための会計・税務講座				
日程	8月~11月	参加人数	—	会場	オンライン(Zoom)
概要	芸術文化領域の会計・税務業務のエキスパートである講師陣を迎え、活動基盤の違いを踏まえた4講座を開設。各講座では、会計・税務の基礎知識、持続的な団体運営や事業運営のためのヒントを提供。 企画運営事務局担当				

事業名	早稲田大学演劇博物館 ドーナツ・プロジェクト2023 実践編 連続講座 全12回				
日程	7月～9月	参加人数	—	会場	早稲田大学早稲田キャンパス(東京都)
概要	令和5年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業 舞台公演記録のアーカイブ化のためのモデル形成事業「ドーナツ・プロジェクト」 運営事務局担当				
事業名	令和4年度文化庁委託事業 「芸術家等実務研修会」「関係づくりを学ぶ! 現場で使える契約講座」				
日程	2月～3月	参加人数	—	会場	—
概要	文化庁からの委託を受け、舞台芸術制作者・プロデューサー向けの研修会「関係づくりを学ぶ! 現場で使える契約講座」として契約実務をオンラインで学べるeラーニングの配信と対面型のワークショップを実施。令和4年7月に文化庁が公表した「文化芸術分野の適正な契約関係構築に向けたガイドライン(検討のまとめ)」の実効性確保の観点から、受注・発注両方の立場になりうる舞台芸術制作者・プロデューサーを対象に、適正な契約関係構築のため必要な知識を身に付けられるようにするもの。 東京2月16日(木)、京都2月20日(月)、札幌2月28日(火)、福岡3月6日(月)の4箇所で開催。 企画運営事務局担当				

會員提案企画

会員提案企画 「おしゃべり会for地方制作者」

日時	①2023年10月20日(金)21:00～23:00 ②2023年12月6日(水)21:00～23:00
会場	オンライン (Zoom)
企画・主催	伊藤美笑子
執筆	伊藤美笑子

※所属、肩書き、団体表記は企画開催時のものを掲載しています。

2023年より「おしゃべり会for地方制作者」を開始した。私は2019年、知人の勧めでON-PAMに入会した。入会後は多くの情報を得ることができ、有意義に感じていた。当時は舞台事業から別部署への人事異動を経験し、さらに乳児を抱えていたため、強い孤独感を感じていた。そのような状況の中、事務局から会員提案企画に関するヒアリングアンケートが届き、回答したことがきっかけで事務局から連絡をいただいた。その後、事務局の方々と意見交換を重ねる中で、自分の中にあった問題意識を具体的な企画として形にしたいという思いが強まった。

話し合いでは「孤独」「地方」「気付かれにくい実務を担う制作者」「交流」といったキーワードが挙がった。改めて自身の孤独感を振り返ると、人事異動や子育てといった状況は自分だけの問題ではなく、多くの人が抱える課題であると気づいた。さらに、その孤独を理由に舞台芸術制作の仕事を続けられなくなる人がいるかもしれない。それは個人にとっても業界にとっても損失であると考えた。当初は「おしゃべり会for地域制作者」とする案もあったが、「地域」だと漠然としてわかりにくく、対象者が定まりにくいと感じた。そのため「地方」とすることで対象が明確になり、参加者にとってわかりやすくなると判断し、現在の名称とした。

「おしゃべり会for地方制作者」は、すべての参加者が対等で自由に話せる場であることを重視している。具体的なトークテーマは設けず、話したいことを話し、愚痴や悩みも言ってよい場とし、他者を否定しないことだけをルールとしている。明確な答えを得る場ではないが、参加者が自由に意見交換することで気持ちを整理したり、交流を深めたりできる場としている。気軽に参加できる雰囲気づくりを意識している。

2023年10月に第1回を開催し、その後概ね隔月で継続している。初回は参加者数が読めなかったが、全国から14名、2回目は15名が集まり、ざっくばらんな意見交換が行われた。参加者から「特定の地域に絞った回も開催してほしい」という要望があり、2024年2月の第3回では「近畿編」を実施。この会を通じて、これまで接点の

なかった地域の方々と出会い、その地域の演劇情報を共有したり、悩みを分かち合ったりすることができた。単発ではなく、継続的に開催することの意義も実感している。

この会は「誰かのためになれば」と始めた取り組みだったが、今では私自身にとっても大切な場となっている。参加してくださった皆様、関心を寄せてくださっている皆様、そして支えてくださるON-PAMの皆様に深く感謝している。

会員提案企画

「松波&寺田の海外フェスティバルおしゃべり会」

日時	2023年12月23日(土) 14:00～15:30
会場	Camp／オンライン(Zoom)
企画・主催	松波春奈、寺田凜
執筆	松波春奈、寺田凜

※所属、肩書き、団体表記は企画開催時のものを掲載しています。

「松波&寺田の海外フェスティバルおしゃべり会」は、2023年にそれぞれ海外のフェスティバルを訪ねたON-PAM会員の寺田凜と松波春奈によっておしゃべりベースで共有したいという想いから、企画された。

寺田は台北アーツフェスティバルへ自主的に参加した。自身が東京で人材育成事業を担当していることもあり、ADAM(Asia Discovers Asia Meeting for Contemporary Performance)という若手アーティスト向けの人材育成事業に重きを置いてプログラムを見て回った。

松波はアーツカウンシル東京「アートマネジメント人材等海外派遣プログラム」にてエディンバラ・フリンジ・フェスティバルを訪ねた。世界最大の芸術祭で、演劇、ダンス、サーカスなど様々なジャンルの作品を観劇、シンポジウムへの参加などをした。

参加者たちはオンラインで参加しリラックスした雰囲気、フェスティバルの規模感や観客、街の様子、食事についてなどを共有する会となった。

第1回 政策提言調査室勉強会
フリーディスカッション
「行政との関係を考える」

第1回 政策提言調査室勉強会 フリーディスカッション 「行政との関係を考える」

日時	2023年3月22日(水) 19:30～21:30
会場	オンライン (Zoom)
コーディネーター	野田邦弘(横浜市立大学大学院 都市社会文化研究科 客員教授)
運営	横山義志(ON-PAM政策提言調査室 室長)

※所属、肩書き、団体表記は企画開催時のものを掲載しています。

この会では、文化行政と現場のあいだに横たわる構造的な課題を起点に、制度・法律・人材・政治・市民意識までを含めた多層的な論点が共有された。

まず、行政と現場の価値観の違いが大きな前提として確認された。行政は制度や公平性、単年度予算、人事異動を前提に動く一方、現場の芸術実践は継続性や関係性、個別性を重視する。そのズレが、事業の突然の終了や、長年積み重ねた成果が正当に評価・継承されない状況を生んでいるという問題意識が示された。特に、担当者の異動によって事業の継続可否が左右されることが、現場にとって大きな不安定要因となっている。

一方で、個人の強い意志や政治的な調整力を持つ行政職員がいることで、画期的な文化事業が実現する事例も共有された。つまり「担当者次第」という構造は、問題であると同時に可能性も内包している。ただし、それが属人的である限り、持続可能な文化政策にはなりにくいという点が繰り返し指摘された。

この背景には、日本の行政制度がジェネラリストを前提としており、専門性を持つ職員を育てにくい構造があること、また文化分野の専門職制度が制度的に十分整備されていない現状がある。研修制度は存在するものの、それが専門職配置の代替になってしまい、結果的に専門性の蓄積を阻害している可能性も議論された。

さらに、文化政策が行政内部だけで完結しない問題であることも強調された。文化は本来、福祉・教育・医療・地域づくりと深く結びついており、単なるコンテンツ提供や集客施策では測れない社会的価値を持つ。その価値を「楽しそうだった」「来場者数が多かった」といった表層的な指標だけでなく、社会的成果として可視化・評価し、記録として残す仕組みが不足していることが、事業の正当性や継続性を弱めているとの指摘があった。

また、文化政策が選挙や政治の場で十分に論点化されていない現状も共有された。予算規模が大きくなるほど、最終的な意思決定は首長や議会に委ねられるが、文化が政治的争点になりにくいいため、市民的議論や民主的なチェックが働きにくい。文化に理解のある議員や政策ネットワークを増やし、市民の側から関心を可視化していく必要性が語られた。

議論の終盤では、今後の鍵として、行政・アーティスト・市民をつなぐ「翻訳者」的な専門人材の必要性が浮き上がった。作品の価値を社会的文脈や政策言語に変換し、行政や議会、市民に伝え、評価につなげる役割である。この役割を個々のアーティストや担当職員に押し付けるのではなく、制度や組織として支えることが、持続可能な文化政策には不可欠だという認識が共有された。

最後に政策提言調査室室長の横山氏から、短期的な不満や制度批判に留まらず、人口減少や分断が進む社会の中で、文化政策が果たすべき役割を再定義し、現場と行政が対立ではなく協働しながら未来を設計していく必要性について確認され、本会を締め括った。

共創するアートマネージャーと
アーティストのための
「Co-Creation Camp」
by Next Producers Meeting

共創するアートマネージャーとアーティストのための 「Co-Creation Camp」 by Next Producers Meeting 公開セッション〈Camp-1〉

日時	2023年7月14日(金)～16日(日)
会場	YAU STUDIO
執筆	松波春奈

※所属、肩書き、団体表記は企画開催時のものを掲載しています。

1日目	7月14日(金) 14:00～16:00 ● レクチャー「誤解なき『心理的安全性』と『チームの多様性』のためのレクチャー」 講師：植松侑子 ● ワークショップ「他人に目標を立ててもらおう『タニモク』」 ファシリテーター：谷陽歩 ● 参加者交流会
2日目	7月15日(土) 10:30～12:30 / 13:30～15:30 ● 「アートマネージャーの視野・視点をケーススタディーする」 ファシリテーター：坂本もも ● 「アーティストの視野・視点をケーススタディーする」 登壇者：y/n、小野彩加 中澤陽 スペースノットブランク、円盤に乗る派
3日目	7月16日(日) 11:00～12:00 ● ライトニングトーク 1、2日目のインプットをふまえ、自身のチームについて短いプレゼンテーション(ライトニングトーク)を実施。 登壇者：〈チーム白昼夢〉大蔵麻月(制作)、石坂雷雨(主宰／演出)、米山昂(脚本) 〈チーム譜面絵画〉大川あやの(制作)、河崎正太郎(制作)、三橋亮太(演劇作家) ● ラップアップ



左より〈チーム白昼夢〉大蔵麻月(制作)、米山昂(脚本)、石坂雷雨(主宰／演出)、〈チーム譜面絵画〉三橋亮太(演劇作家)、河崎正太郎(制作)、大川あやの(制作)

CCC Camp-1(有楽町)

共創するアートマネージャーとアーティストのための「Co-Creation Camp」(CCC)は、公演や作品創作プロセスの中で協働するアートマネージャー(制作)とアーティスト(演出家や脚本家)のチームを対象に、有楽町(東京)、豊岡(兵庫)にて開催した。本稿では、有楽町で行われた3日間のプログラムを紹介する。お互いを知り、可能性を広げるためのレクチャー、ワークショップを中心としたプログラムで構成された。

「誤解なき『心理的安全性』と『チームの多様性』のためのレクチャー」

植松侑子氏によるレクチャーから1日目が始動。ここでは、創作現場においての安全性を保つための考え方や意識の持ち方の必要性について考える

時間となった。

まず、「チームとは特定の目的を持って物事を改善していくための組織であり、ただの人の集まりではない」という定義が植松氏から説明された。また、同じ目的を掲げているグループでは、似た境遇や属性の人が集まることもあるが、その場合、多角的な視点が欠ける原因にもなるという。目的によって集まるべきメンバーが変わること、そして、それぞれ役割があることにより組織にはヒエラルキーが必ず存在するということが確認された。その中で「何も言えないという環境は心理的安全性があるとは言えない」と植松氏は強調したうえで、「誰の意見にも反対せずに空気を読んで忖度する状況ではなく、また、何でもかんでも言いたいことを言い合える環境とも違い、言い辛いけど言わないといけなことを言えるチームこそが心理的安全性がある組織だ」という。多様性を尊重することとは、組織の人全員を好きになることではなく、知らない、出来ない、

やってみようと言える環境である。そんな環境こそ、心理的安全性が保たれていると植松氏は説明。参加者からの質疑では、それぞれの立場や状況において具体的なアドバイスを植松氏に仰いだ。より良い創造環境を作ろうとしている参加者にとって、具体性があるレクチャーとなった。

ワークショップ「他人に目標を立ててもら『タニモク』」

次に開催された、谷陽歩氏によるワークショップ「他人に目標を立ててもら『タニモク』」は、パーソナルキャリアによるワークを基に展開された。3人または4人組になり、相手の話を聞き、自分がその人だったらどんな将来を描くか、そのための具体策を考えるワークショップだ。

ワークでは、1人目のメンバーが自己紹介と、自分の活動について他のメンバーに説明をする。その

後、他のメンバーからなぜその活動をしているか、どんな思いがあるのか、何に興味があるのかインタビューを受ける。

自己紹介とインタビューを経て、他のメンバーは、その人になったつもりで、「私があなただったら持つ将来の目標」を絵に描いてプレゼンして終了。他の人がその人になりきることで、本人がまだ描けていなかった将来像や、他者から見て面白い視点などが将来の目標に盛り込まれていた。この取組みは、自分の興味がどこに向いているのか、意外なポイントに気が付くことができる面白いワークショップであった。

「アートマネージャーの視野・視点をケーススタディーする」

2日目は「アートマネージャーの視野・視点をケーススタディーする」として、坂本もも氏による「ここちよい創造環境を考える」ワークショップを実施。



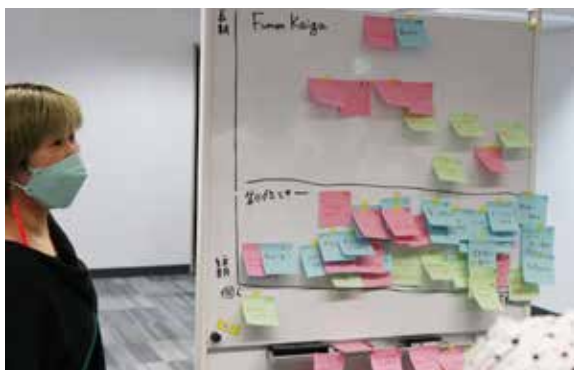
レクチャーを行う植松氏



「他人に目標を立ててもらおう『タニモク』」開催中の様子



ワークショップ中、書き出した要素を4つの軸に分類する様子



まずは自分にとってここちよい創造環境の要素を付箋に書き出し、その後チームごとに、長期的／短期的／全体的／個人的という4つの軸に分類していく。さらに各チームの中で、挙げられた要素を似ているもの同士で分類した。例えば、「更衣室がある」、「冷暖房が完備されている」等が挙げられ、それらは設備というカテゴリに分類された。似ているようで、実は物理的な問題と生理的な問題に分かれる事柄が出てきて、自分にとってのここちよさとは何かに気が付くことができる時間となった。

分類分けをした後は、各チームの発表を聞き、同じような点を課題と感じていることが判明したり、

見落とししたりしていた事柄に気が付くことができた。

後半には、アーティストとアートマネージャーの既存の関係性にとらわれないチームを形成する、y/n、小野彩加 中澤陽 スペースノットブランク、円盤に乗る派の3組をゲストスピーカーに招き、ディスカッションを行った。参加のグループは共創をしているチームであることからお互いの関係性について質問を投げかけ合い、自分たちはどのように活動に取り組んでいるか紹介された。同じグループでもメンバー同士で丁寧に関係性を築いていることが分かり、伝えること、聞くこと、そして話し合うことが大切なのだと感じられる時間となった。

ライトニングトーク

最終日となる3日目は、参加者が自身のチームについてプレゼンテーションを実施。

白昼夢は、教室公演と呼ばれる大学の教室を使用した0回公演から活動が始まり、学園祭での紙芝居パフォーマンスや、大学内の劇場で作品を上演してきた。在学中に参加、受賞した学生演劇祭で他校の学生と出会い、以後の白昼夢の作品に俳優として出演してもらい、劇団員になったメンバーもいる。街中でのゲリラ公演では、街ゆく人の反応の違いを実感し、またコンクールへの参加・受賞では、演出に対する想いを再認識するきっかけとなったそう。その後、活動を続けていくかどうか悩み、一度は活動を休止したが、再開を決めた時にコロナウイルスが流行し、再び活動休止となった。休止中には劇団員からの呼びかけで話し合いを重ねたことが活動再開に繋がったと話された。

譜面絵画は脚本・演出家・俳優・制作の6名からなる劇団で、新たな体験性、ライブ性を制作目的として、演劇的想像力を介して誘発および展開するための作品を発表している。教室や学園祭など活動当初から劇場以外での作品上演を数多く行い、画廊で上演した作品をきっかけに場所へのこだわりを持続けている。その後の上演作品からテーマに生や死を扱うようになり、コロナ禍での一年間の活動休止を経て、

新たなスタイルでの作品発表へと至った。戯曲を音楽アルバムのように先に発表し、上演していくというプロセスが特徴的。今後は、場所の力を信じて人の想像力をいかにして喚起できるかが目標と話す。今回、活動を振り返ってみることでチームメンバーやスタッフとの長く続いている関係性を大切にして上演していきたいと感じたという。

お互いの活動についての話を聞く時間では、白昼夢は何がきっかけで紙芝居を始めたかという質問に対して、「劇団の宣伝になり、お客さんがラフに見られるパフォーマンスは何かを考えたことがきっかけだった」と応答。紙芝居に出てくる雲人間は白昼夢のキャラクターで、絶えず形が変わっていく雲と、演劇に共通点を感じて出来たという。

演出と脚本家が分かれていて、体と言葉をどのように捉えて創作しているのかという質問に、米山昂氏は「脚本を書く際に、ト書きも含めてその物語の中の世界で起こっていることをそのまま書いている」と話し、稽古していく中で役者の身体性から演出が見えてくるようなイメージが共有された。以前は、石坂雷雨氏が脚本・演出どちらも担い、演出を想像した上で脚本を書いていたが、現在は稽古中にお互いが想定していなかった発見が生まれ、面白いそう。劇中のダンスシーンは他とは分けて、振付家との相談のもと創作される。当初俳優として作品に出演していた



白昼夢の制作メンバーによるプレゼンテーション



譜面絵画メンバーによるプレゼンテーション



チーム白昼夢(写真左)とチーム譜面絵画(写真右)が質疑応答を交える様子

制作の大蔵麻月氏へ、制作者になった理由を問う質問も出た。大蔵氏は「元々、演劇をやりたい思いから俳優だけでなく演出部にも携わっていた。俳優を続けていくか悩んでいた際に、制作としての活動の提案を受けて、制作として演劇に関わることを決めた」という。その頃、久しぶりに白昼夢の作品を観て面白いと思い、これを他の人にも観てもらわないといけないとの思いで制作として合流したそうだ。

譜面絵画への質問で、劇場ではない上演会場をどうやって見つけているか、というものには、「大まかなテーマを持って会場を探した後、リサーチを重ね、その場所でやれることを考えていく」と回答。その場所で起こりそうな会話やエピソードがイメージできるか、テーマと空間との親和性、あるいはこんなギャップがあれば面白いと思える場所に魅力を感じるそう。劇場は場所(空間)としての個性が感じられにくいので、以前は劇場で上演することにあまり惹かれていなかったが、劇場での上演も行っている今となつては、劇場が守られた空間であることに安心しているという

変化もあったという。

同じく譜面絵画への質問として「最近の作品にて、能の手法も取り入れているが、きっかけは何か」という質問も出た。それに対して、「3.11以降、そしてコロナ禍を経て、どんな文脈を持って死者との対峙が出来るかを考えていた。能の手法を用いて、シリアスとシリアスの間の感覚で創作が出来ると思っている」という応答があった。

お互いのプレゼンテーションを通して、新たな発見や創作において気になることについて、じっくり意見が交わされた。

Camp-1を通して、参加した2団体の過去に掲げてきたテーマや遍歴を辿り、そして現在地を確認できたと感じた。2組で発表し合うことでお互いの考えを共有でき、自己を見つめ直しながらも他者視点での気づきが得られる3日間となった。

共創するアートマネージャーとアーティストのための 「Co-Creation Camp」 by Next Producers Meeting 公開セッション〈Camp-2〉

最終公開プレゼンテーション「わたしたちの共創計画」

日時	2023年9月18日(月) 11:00～12:30
会場	まちの基地アンテナ
スピーカー	〈チーム白昼夢〉大蔵麻月(制作)、石坂雷雨(主宰/演出) 〈チーム譜面絵画〉大川あやの(制作)、河崎正太郎(制作)、三橋亮太(演劇作家)
執筆	鳥井由美子(ON-PAM理事)

※所属、肩書き、団体表記は企画開催時のものを掲載しています。

本会は、ON-PAMが次世代のアートマネージャーのネットワーク構築や環境整備にフォーカスを当て、共に集い対話し、コミュニケーションをはかる企画として実施している「Next Producers Meeting」(以下、NPM)のプログラム「Co-Creation Camp」(以下、CCC)。CCCはアートマネージャーとアーティストのパートナーシップを見つめ直す企画として豊岡演劇祭と共同で実施した。CCCでは〈Camp-1〉として東京・有楽町で7月に実施、〈Camp-2〉では豊岡で3日間のキャンプを実施した。

Camp-2では、CCCに参加した「白昼夢」と「譜面絵画」の2団体が豊岡演劇祭を訪れ、一緒にレクチャープログラムを受講したり作品を観劇して感想を交換したりなど、コミュニケーションを通してお互いの関係性を深めていった。今回は、Camp-1とCamp-2を通した最終プレゼンテーションとして「わたしたちの

共創計画」を発表する。それぞれの団体からこれまでの活動紹介とCCCを経て考えるこれからの活動についてプレゼンテーションが行われる。会の後半では、観客も交えて未来についてディスカッションした。

白昼夢によるプレゼンテーション

劇団「白昼夢」によるプレゼンテーションでは、豊岡キャンプに参加する制作の大蔵麻月氏と演出家の石坂雷雨氏より発表が行われた。大蔵氏は、「CCCを経て団体運営と公演制作の違いを考え始め自分がやりたいことは団体運営であることに気づいた。これからも制作として私がやるべきことは団体運営とメンバーの対話のきっかけづくりだ」と話した。

続いて、東京キャンプを経てメンバーと作成した白昼夢の5ヵ年計画が発表された。それぞれの思いの

集積のようにメンバーが個別に計画内容を書き込んだ計画表だが、いくつか共通する部分もある。この計画を通し、白昼夢の名刺になる代表的な本公演作品を作るのが良いかもしれないとメンバー間で話すことができたのだという。2ヵ月間のプログラムを通し、「自分たちの現状を認識することができた。CCCにはほぼ2人だけで参加したが、4人全員が揃って『白昼夢』について考えるのが最適だということにも気づいた」と言う。白昼夢は「今、劇団が再スタートを切り、何かを吸収するのにとても良い状態だと気付いた。だからこそCCCを経てより良くなることを信じ引き続き活動したい」と話した。

譜面絵画によるプレゼンテーション

劇団「譜面絵画」のプレゼンテーションでは、制作の大川あやの氏と河崎正太郎氏から今後やりたいこと、これからも大切にしたいことの軸となる3つが発表された。ひとつは自分達が考える「新たな切り口」を大切にし、常に時代に合わせた作品を上演したいということ。もうひとつは、国内外問わずリサーチを通して作品創作することに今後は挑戦したい、土地や会場の文脈を引き続き大切にして作品を上演したいということ。最後の3つ目として、「環境整備」について触れられた。現在は劇団員が日本各地の様々な場所で生活している。これからも彼らと活動が続けられるようにしたい、創作環境をより良くし、良いものを作りたいという思いがある。今後も場の力や人の想像力を信じて

作品を作り続けることが今の目標だと話された。

会場を交えたディスカッション

会場の参加者からは、「小規模な公演と大規模な劇場公演との活動の関連性や違いがあれば教えてほしい」、「両劇団ともに特殊な上演形態や繊細な活動テーマをもっているが、アイデアマンがいるのか、そうであればメンバーはそれを受けてどのように反応するのか?」「メンバー集めはどのようにしてきたか?」などの質問が登壇者に投げ掛けられた。

白昼夢は、まずは劇場でやる大きめの作品を見てもらうことが主軸という。しかし、紙芝居演目「雲男の紙芝居屋」のような小さなものは団体を知ってもらう宣伝として始めたものの、コロナ禍を経てたくさんの上演機会を得たことで、紙芝居の位置付けも徐々に確立しつつあるとのこと。いっぽうで譜面絵画は、「作品がどの場所にふさわしいかという考え方がベースにあるため、作品スペックの大小による作品の位置付けには大きな違いはない」と回答。また、両団体ともに作家、演出家を担う人が多い場合、彼らが創作の起源となることがわかった。メンバー集めについて、譜面絵画は人を集めることも含めて一緒に共存していくことに悩んでいると明かした。「大学を卒業して以降はどのように新しい関係性を築いていくかが悩み。長く付き合ってくださいの方ともこれからも一緒にやっていきたい」と話した。



白昼夢のプレゼンテーション



譜面絵画のプレゼンテーション



両チームのメンバーで記念撮影

CCCを終えて、それぞれが考えること

最後に、2ヵ月間参加したCCCの感想をそれぞれが話した。まず、大蔵氏はこう振り返った。

「とにかくメンバーとたくさん話をした。自分たちの最近の身の周りの話や今回のプログラムの話、どんなことに興味があるのか、価値観や観劇の感想の交換など。CCCに参加する以前はそういうことを“何となく”やり過ごしてきたが、今回のように場が用意されることでビジネスパートナーとしてもさらに仲が深まったと思う。譜面絵画と出会えたことも自身にとって特別だった。普段は当日運営の手伝いや制作の勉強として年上の人と交流することが多い。近い世代の人と意見交換したりプレゼンテーションを見聞きしたりする機会が貴重だった」

石坂氏は、「CCCを通して作品創りの面だけではなく他のプロデューサー、演出家やディレクターから話を聞けたことがとても新鮮だった。そういう面から現在の演劇や演劇祭を見ることを経験したことが新しい楽しみ方の発見になった」と話す。

大川氏は、「豊岡キャンプでせっせと劇団のメン

バーとプレゼンテーション資料を作りながら取り留めのない話をする時間がとても貴重だった」と話す。自身が仕事で劇団とは離れた地域で暮らすようになったことやコロナ禍の関係で孤独感を感じることもあった昨今だが、CCCに参加し様々な人と出会えたこと、一緒に集まって話す場があるだけで有り難かったという。

河崎氏は、「内省をしながら外にも目を向けることを同時に行える機会にはこれまではなかった」と振り返った。そして、こう続けた。「取り留めのない話を他団体の人とする機会もこれまではなかったし、関係性を築くという点においてCCCはとても良い機会だった。同じ演劇祭に参加していたとか、同じ大学出身であるとかではなく、少し世代の離れた人たちに出会えたことが今回は特に良かった。横の繋がりの強化以上に、縦の繋がりも含めてより立体的な繋がりをCCCで補助してもらえた感覚がある。今後もこのようなことがあるととてもいい」。

以上で、7月のCamp-1、9月のCamp-2にわたり行ったCCC2023が終了した。

豊岡演劇祭2023 連携プログラム

Next Producers Meeting in 豊岡2023

豊岡演劇祭2023 連携プログラム

Next Producers Meeting in 豊岡2023

日時	2023年9月16日(土) 11:00～13:00
会場	まちの基地アンテナ
スピーカー	目澤芙裕子(ダンスカンパニーBaobabプロデューサー／有限会社ゴーチ・ブラザーズ マネージャー・制作／合同会社Wint2代表) 新田幸生(プロデューサー／合同会社妥当解釈代表)
ファシリテーター	坂本もも(ON-PAM理事／範宙遊泳プロデューサー／ロロ制作／合同会社範宙遊泳代表)

※所属、肩書き、団体表記は企画開催時のものを掲載しています。

次世代の舞台芸術制作者／アートマネージャーの環境整備を目的に企画した「Next Producers Meeting」。今回は「豊岡演劇祭2023」との連携プログラムとして、国際的な活動やキャリアについて話すトークセッションを開催。海外の関係者とのネットワーキングや国際交流事業を行っている目澤芙裕子氏と新田幸生氏をゲストスピーカーに招き、これまでの経験や取り組まれている国際交流プロジェクトについて語られた。

はじめに、舞台芸術制作者／アートマネージャーとして、どのようにキャリアを築いてきたか、ゲストの2人に聞いた。マネジメント・プロデューサー・ダンサーとして活動する目澤氏は、幼少の頃オランダでダンスをしていた経験からノンバーバルコミュニケーションの魅力に気付き、桜美林大学でコンテンポラリーダンスを学んだ。卒業後、同期の北尾亘が立ち上げた「Baobab」に加入し、一緒に活動をしていく中でカンパニーの制作を始めるようになった。Baobabの活動のほか、文学座やゴーチ・ブラザーズで俳優のマネジメント業務を行い、フリーランスに転身後は海外

招聘公演の制作業務などにも携わる。現在は、自身で法人を立ち上げ劇場やフェスティバルの仕事へと展開している。

新田氏は、台湾の大学でヒップホップのダンスを始めたことをきっかけに、台北芸術大学大学院のアートマネジメントコースに入り、舞台芸術の制作の仕事をした。その後、劇団のプロデューサーや、台北フリンジ、台北芸術祭のプロデューサーとして活動。日本ではYPAM(横浜国際舞台芸術ミーティング)や日台のアーティストの共同制作のプロデュースを行うなど日本と台湾を行ったり来たりして仕事をしている。2020年～23年まで、台北近郊にあるCloud Gate Theatre のシアターマネージャーとして活動中だ。

そして、両氏が運営チームとして参加している「APP(Asian Producers' Platform)」について話された。2人はAPPキャンプに参加し、その経験が制作としての人生を変えるきっかけとなったという。新田氏は、APPキャンプで実施したディスカッションで、「プロデューサーとは何か」を語り合った際に、



イベント中の様子。マイクを手に持っているのが新田幸生氏。その左隣が目澤美裕子氏

プロデューサーの生き方がとても多様だと感じたことを振り返る。最初に参加した時には、各国からライブハウスを運営しながら活動する人や、国際フェスティバルに参加している人、社会運動をリードしているプロデューサーがいるなど多様な人が集まっていたことに驚いたという。APPキャンプは、国際的なプロデューサー達が集い、情報交換をするなど共同制作のサポートができるシステムとして機能しているが、それだけでなく、各地で孤独に働くプロデューサー同士が心のケアをし合えることが印象的だと語った。

目澤氏からは、APPキャンプでの出会いはプロジェクトを通じた関係性とは異なり、利害関係のない交流が魅力だと話された。また、プロデューサーの育成には時間がかかると言い、人材育成の側面も持つAPPキャンプの継続の重要性を強調した。

後半は、進行の坂本もも氏から質問が投げかけられた。まずは、それぞれのアイデンティティとルーツが

海外にあることが舞台芸術の仕事に繋がるきっかけになったかについて聞いた。

目澤氏はダンスが自分のルーツであること、オランダのダンス教室で言葉がわからなくても楽しかったことが、今の活動に繋がっていると話した。プロデューサーになりたいという考えは当初はあまりなく、ダンスをどう続けられるかをずっと考えてきたという。

新田氏は国際事業を行っていたときに、1回の公演で観客との関係性が終わってしまうという課題意識から「長期的な関係をつくるなど、自分でマネジメントできる立場になりたい」と考えるようになった。フリーランスとなり、アーティストや観客も巻き込んだかたちで複数年かけて行う国際共同制作に取り組んでいる。また、プロデューサーとして現場から少し離れる力や、働くペースのバランスの取り方についても言及された。

坂本氏から、アーティストとどう関わっているのかについて尋ねられると、新田氏は国際交流事業をする

時も、アーティストを巻き込みながら一緒に作っていると話し、現地の人とアーティストが関係性を作るように複数年かけて取り組むことを心掛けていているという。アーティストが交流先の国に対する知識や理解を持つことを前提に、信頼関係が大事な要素だと語る。目澤氏からは、コロナ禍を経て、国際交流に貪欲な願望を持つアーティストが減っているのではないかという課題も共有された。

その後、会場の参加者も交えたラウンドテーブルでは、自信を持って作品を創ることや、アーティストや作品をどうプレゼンテーションできるかが国際的なシーンで活動する際に重要だと話された。2人は、強いモチベーションで始めたプロデューサーの仕事であり、継続するためにも仕事の環境を整えることが大事だという。また、アーティストのキャリアアップのために必要な新しい視点や国際フェスティバルの役割についても話が展開した。最後に、参加者同士のコミュニケーションにも繋がる有意義な場となったと感想が話され、閉会した。

ON-PAM 委員会 2023 @YPAM
「オープン・ディスカッション」

ON-PAM 委員会 2023@YPAM「オープン・ディスカッション」 オンラインセッション: Talking about producers' network in Asia – Focus on the case of APP

日時	2023年12月6日(水) 11:00～12:30
会場	オンライン (Swapcard)
ゲストスピーカー	Annette Shun Wah (Creative producer/Artistic Director) Cui Yin (Independent Producer) E-Jan Tan (Founder of InSitu Arts Management Consultancy/Co-Founder and Creative Producer of Toccata Studio) 目澤芙裕子 (ダンスマネジメントプロデューサー / ダンサー / ダンスカンパニーBaobab / ゴーチ・ブラザーズ / JR東日本文化創造財団所属)
モデレーター	齋藤 啓
執筆	崎山 貴文

※所属、肩書き、団体表記は企画開催時のものを掲載しています。

アジア各地で活動する4名のゲストスピーカーとともに、「Asian Producers' Platform(以下APP)」によって培われたアジアのインディペンデント・プロデューサーのネットワークについて語った。まず、各ゲストとAPPとの関わりについて。オーストラリアで活動するAnnette Shun Wah氏は、2014年に韓国・ソウルで開催された第一回よりAPPに参加し、その後の10年間、APPの一員だったことが自身のキャリアの重要な部分を占めていると話す。APPでアジアの国や地域を跨いだ出会いを経験し、多くの長きにわたる友人や同僚を得たことで、孤独に陥りがちなプロデューサーという仕事をする中でも、仲間との協働で自身のキャパシティを広げられたと言う。

E-Jan Tan氏は、マレーシア拠点のプロデューサーで、2014年から毎年参加。2018年からはAPP

プランニングコミッティーの一員となり、2024年マレーシアで開催されるAPPキャンプのオーガナイザーも務める。参加を重ねる中で、なぜ自分が今の活動を行っているのか、どのように改善していけるのかといった問いを定期的に見つめる機会になっていると話した。

目澤芙裕子氏は横浜を拠点としており、2018年にAPP初参加。5年前に27歳でプロデューサーとしてのキャリアをスタートした時、日本国内では同世代で国際的な視点を持つプロデューサーと出会えず、APPでアジアのさまざまな地域から集った同世代の参加者と、同じ課題を共有できることに喜びを見出した。2023年のYPAMにて、APPで出会ったマカオのプロデューサーErik Kuong氏の作品を上演するなど、APPを通して得た繋がりが、自身の活動にも活かされていると紹介した。

シンガポールを拠点に活動するCui Yin氏は、他のゲストと同様、プロデューサーとして孤独を感じていたが、APPでの経験を通じてプロデューサーである自分自身についての考えを深め、どのような自分でありたいかを模索することができる、APPを通して出会った仲間達とお互いに対する夢を持ち合える、と話した。

続いて、APPというプラットフォームが、アジアのネットワーキングに与えた影響について、ゲストの意見を聞いた。APPの価値は信頼の構築にあるという言葉が出た。国際的なコラボレーションで直面する課題に対しても、長い期間をかけて築いた信頼で対処することができる。APPに参加しているプロデューサーが、プレゼンターやアーティスト、プラットフォームをお互いに紹介し合うことで、活動に広がりを与える効果についても強調された。

また、APPを開催する都市への影響について、バンコクでのAPPキャンプを事例にあげ、現地のプロデューサーやオーガナイザーをはじめとした、現地でのネットワーク構築にも貢献したと話す。その他、開催地の文化や、現地の人々の芸術活動の事例について、新たな視点を獲得することができたという学びがあった。APPの中心主義的ではない在り方により、参加者がそれぞれのネットワークやコミュニティーを構築することができるという声が挙がった。

議論の中でE-Jan Tan氏は、なぜプロデューサーのためのレジデンシーが必要なのか、という視点を投げかけた。プロデューサーは、予算管理やマネジメント等が仕事の中心、というステレオタイプが根強い中、より多様な視点で考えを深めるための場として、APPがあると提起した。例えば、よりよいエコシステムをどう構築するか、どのようにアーティストをサポートして成長させるか、観客の育成、観客の参加意欲を高めることなど、APPを通して交わされる議論は多岐にわたると言う。Cui Yin氏より、「APPを通してさまざまなプロデューサー観に触れること、実際に成功している

姿を見ることが肯定的な経験となり、自身のプロデューサーとしての考え方も育った」という意見もあった。

また、前述された中心主義的ではないネットワークというキーワードについて、APPのネットワークと、そのスピノフとして繋がりが広がった広大なネットワークを維持していくために、英語を共通言語として定めてきたが、英語を使って深い内容を表現できない参加者がいる場合もあり、通訳者の確保が課題であるとの意見も挙がった。その他、パンデミックを経て昔からのメンバーと新しいメンバーをどう繋げていくかという課題についても共有された。

最後に、APPのネットワークの発展のため、継続的な予算獲得を目指していることや、次回マレーシアで開催されるAPP、および日本からの参加者の窓口となる団体「プロデューサーズコネクトジャパン」について紹介された。

ON-PAM 委員会 2023@YPAM「オープン・ディスカッション」 オンラインセッション： 舞台作品を海外(国外)で上演すること、 海外(国外)から招聘することについて

日時	2023年12月7日(木) 15:00～16:30
会場	オンライン (Swapcard)
ゲストスピーカー	June Tan (Producer / Five Arts Centre) Juliet Knapp (共同ディレクター / KYOTO EXPERIMENT)
モデレーター	齋藤啓
執筆	崎山貴文

※所属、肩書き、団体表記は企画開催時のものを掲載しています。

ゲストのJune Tan氏、Juliet Knapp氏と共に、新型コロナウイルスのパンデミックを経て、舞台芸術を通じた国際的な交流にどのような変化があったのか、今後どのように活動を行っていくのか話し合うオンラインセッションを実施した。

マレーシア・クアラルンプールを拠点に活動するJune氏は、YPAM2022で上演された『仮構の歴史』のプロデューサーでもある。『仮構の歴史』は、前作の『Baling』から派生したもので、マレーシア政権交代に伴って新しく作られた歴史の教科書を、過去の教科書と見比べるところから始まり、「公式の歴史」とそこから排除された物語について語る作品である。TPAM2019でワークインプログレスを上演し、その後ジャカルタでの創作、埼玉、ブリュッセルのツアーを予定していたが、新型コロナウイルスの流行がはじまり白紙になってしまったそう。2022年にブリュッセルからツアーが再開され、バンコク、ソウル、

ミュンヘンと上演が実現し、パンデミック前と同じような軌道に戻れたと語る。

Juliet氏は2020年より「KYOTO EXPERIMENT」の共同ディレクターを務めているが、2020年秋に予定していた就任後初のフェスティバルはパンデミックの影響を受け実施が困難になったそう。同フェスティバルは2021年春開催に延期したものの、コロナ禍が続いていたため、オンラインを活用しての開催となった。さらに2021年秋に実施したフェスティバルも、国際的なアーティストを多くは招聘できず、オンラインを活用した形式になった。オンラインなど新しい上演形態を試行する際には、既に信頼関係が構築されているアーティストとでないと進めるのが難しいという気づきがあったそう。オンラインで制作を行ったプロジェクトでは、オンラインであることでリアルよりも親密なクリエーション効果があったという声もあり、オンラインの一定の成果を感じられたと話された。

ここで、June氏から、コロナ禍を経た気づきとして、大勢の人間が一つの場所に集まって同じものに集中し、時間をかけて考えることに人々がより価値を見出している、という意見があった。

Juliet氏も、人々が集まって何か一つのものに注目することの素晴らしさはフェスティバルのエッセンスでもあると述べ、2022年と2023年ではコロナ対策のレギュレーションが異なり、観客やアーティストの親密さの違いがあったと話した。

「信頼」というキーワードにも話がおよび、様々な都市で作品を上演してきたアーティストおよびプレゼンターであるJune氏にとって、フェスティバルディレクターの役割は信頼できるアーティストや作品を集めることにあり、コミッションの獲得や関係性の構築は、信頼を得ることで初めて成し遂げられるものだと強調した。

KYOTO EXPERIMENTでも、数年にわたってアーティストと長期的な関係を構築することが行われており、2021年春に初参加したタイのアーティスト、ウィチャヤ・アートマートと、2022年にリサーチとレジデンシー、2023年に新作のクリエーションと長期的に協働した例をJuliet氏が紹介した。

ここでJune氏から、「コロナ前後で何が変わったのか、舞台芸術の方法が根本的に変わったのか？」と問いが投げかけられた。

Juliet氏は、ここ数ヶ月でやっとコロナ前のペースで移動ができ始めたが、あまりにも早い国際化のスピードに飲み込まれてしまわないよう、なぜ国際的な事業を実施するのかと自分自身に問いかけ、原点回帰する必要があると感じていると言う。

June氏は、パンデミックがあったという事実を認めて、忘れないようにすることが重要で、その上で新たな

ことに恐れずに挑戦することが大事だと話した。

モデレーターの齋藤啓氏にもマイクが移り、パンデミックが世界的な出来事だったと総合的に言及されることが多いが、必ずしも全員にとって同じ出来事だったわけではなく、地域差や個人差を前提に語ることが重要であると指摘した。

最後に、将来的な展望を尋ねると、June氏は資本主義以降の新たなモデル構築において重要なキーワードであるウェルビーイングについて考えていきたいとコメント。Juliet氏は、今後も国際的な文化交流は重要度を増していくが、ツアーしやすいように小規模な作品を作るといったルールのようなものから逸脱し、新しいモデルを構築していきたい、それについての夢を見続けたいと話した。

ON-PAM 委員会 2023@YPAM「オープン・ディスカッション」 シンポジウム： 自治の場として考える劇場／アートセンター

日時	2023年12月12日（火）18:30～20:30
会場	男女共同参画センター横浜南 フォーラム南太田
登壇者	荒井洋文（犀の角／一般社団法人シアター&アーツうえだ 代表理事） 林立騎（那覇文化芸術劇場 なはーと 企画制作グループ長） 三富章恵（NPO法人 アーツセンターあきた 事務局長）
司会	増田愛子（朝日新聞東京本社文化部）
執筆	鳥井由美子（ON-PAM理事）

※所属、肩書き、団体表記は企画開催時のものを掲載しています。

「自治の場として考える劇場／アートセンター」と題した本シンポジウムでは、芸術を通じてどのような社会や未来を描いていくのか、劇場やアートセンターを取り巻く多様な人々が当事者性をもつことにより、場所の意味を再定義する可能性について思考をめぐらせる時間となった。

登壇者には、劇場／アートセンターを通じて様々な取組みを実践している荒井洋文氏、林立騎氏、三富章恵氏の三者を迎え、各氏が携わっている文化施設や活動において関係者や地域の人々とのような関係性を持ち運営・実践されているのか、劇場／アートセンターに集う人々が主体的に関わりをもつ「自治」のあり方について、三者の実践や事例紹介と展開される論点について議論した。

プレゼンテーション

前半は三者による活動紹介と自治にまつわる考えや実情を紹介した。以下に各者の発表をまとめる。

三富章恵氏（NPO法人 アーツセンターあきた）

秋田市文化創造館は、NPO法人アーツセンターあきたが指定管理者として運営する公立文化施設。

- ・ 自由で柔軟な環境をつくること
- ・ 市民ひとりひとりの想像力を尊重し応援すること
- ・ 街の中から生み出された多様な価値を尊重すること

をミッションに、創作・創造に重点を置いたクリエイティブハブとなる施設を目指し運営している。一方で、市民にとって創造活動は敷居が高いと感じる傾向があることや、サービスを提供してもらえると期待があることから、どのように「つくる」ことを身近に感じてもらえるかに課題があった。

秋田市文化創造館を、単なる文化施設としてではなく、コモンあるいは公共財・共有財として捉え、来訪者、利用者、行政や近隣住民など多様なステークホルダーが参加し協調していく「自治の場」となることが理想である。「自治の場」という観点から挙げられるひとつの事例として、文化創造館の敷地でスケーター利用が増えたことをきっかけに生まれた「スケートボード利用を街でどのように許容していくか」という議論を街に開いたことがある。興味をもった市民や行政職員、スケーター当事者達が集まる形で話し合いが行われ、市民からのリアクションを受け取ることや、スケーターによる自主企画（スケートボードの楽しさを一般に周知するイベントやスケーターネットワーク構築のためのイベント）が実施された。このように文化創造館が地域に対して投げかけた問いにより市民の中から主体的な思考や行動が生まれることが「自治の場」としてのアートセンターになりうる一歩ではないか。

文化創造館では、今後も地域に問いを投げかけ、市民の主体的な思考や行動を促していくことで、「つくる」場を育てていくよう活動を続けていく。

荒井洋文氏（犀の角／一般社団法人シアター&アーツうえだ）

長野県上田市の海野町商店街の一角で民間の文化施設「犀の角」を運営している。演劇祭やアーティスト・イン・レジデンスを通じて作品を創ってきた。また結婚式の披露宴会場として活用するなど、街の人の様々なニーズをキャッチしながら施設の活用について思考してきた。コロナ禍で地域の困窮者を支援している人達と話す機会が増え、相談件数が増え

たこと、特に若者や女性への支援が足りないという話を聞いた。犀の角にもホームレス風の人が訪れるようになったり、夜の仕事をしている人が出勤前の時間をずっと犀の角で過ごすようになったりと、これまでと違う実情が見えてきた。

我々には何ができるかを考え始めた時、地域で支援活動をしているNPOから、電話やSNSを通じた支援ではなく実際に人が頼れる場としてシェアハウスを作りたいという相談を受けた。当時、ゲストハウスに空き部屋が多かったのも、犀の角での実施を提案し、困りごとを抱えた女性が500円で宿泊できる宿「やどかりハウス」が始まった。また、「のきしたおふるまい」という炊き出しや、「うえだイロイロ倶楽部」という子ども達のクラブ活動を劇場で行うなど、「のきした」と称した様々な活動を行った。のきしたの活動の一つとして「のきしたジャーナル」を発行し、地域で活動する人たちが自由に議論する言論の場もつくっている。また、「家出チケット」という悩み事を抱えた若者向けにゲストハウスを割引で泊まれるチケットも提供。家出を推奨するのでは、という良くないイメージもあったが、若者が生きづらさを抱えた現状を自治体にも理解してもらう方法としてあえてこのような名前にした。

かつては、劇団が社会包摂的な場として、社会に馴染めない人たちが劇団に入り、居場所や役割を持つことができた。今の時代の劇場の役割として、演劇の上演だけではなく、街の人の居場所になったり、自分を捉え直したり、全く違う方向から人生を考え直したりできる場になりうるのではないかな。

林立騎氏（那覇文化芸術劇場なは一と）

「那覇文化芸術劇場なは一と」は那覇市直営の公立劇場。多様な芸術を鑑賞するだけでなく、人が集い学び合う場所になること、市民主体の文化芸術活動の拠点となることをミッションとして2021年にオープン。

現代芸術のアーティストや伝統芸能を含む様々なジャンルの担い手との関わりから、芸術が自治的な営みであるということを実感した。自治的ということは、誰かに強制されたわけではなく、何か特定の利益や自分だけのためではなく、この世界や自分の生きる土地をより良いものにしていくために日々続けること。自治という言葉に込められた意味には、自分たちの文化を自分たちで守り、また新たに生み出し、その価値を自己決定していこうという姿勢がある。このような自主的な営みとともにある公立劇場は、どのような役割を果たすべきかを考えている。

かつてアーティストと共に作品を創り、今は劇場で働いていて思うのが、公立劇場や芸術祭の役割と、アーティストや作品の役割は明確に異なるということ。作品の社会性や政治性を自らの社会性や政治性であるかのようにふるまうことは、劇場や芸術祭がもつ権力やそれに伴う責任を曖昧にし、アーティストや作品の社会性を不当に奪うことにつながりかねない。芸術作品を自由に発展させるために、表現の自由を掲げ、政治からも行政からも距離をとりたいというのはアーティストが主張すべきことであり、公立劇場をはじめとする公的文化制度は政治や行政の只中で、表現の自由が守られ、文化芸術を基礎とした地域の自治が発展する環境を維持することが役割だと考える。

公立劇場としての役割を実践する自治的な取り組みとして、なは一とでは「なは一とダイアログ」という対話プログラムや「なは一とカンファレンス」という制作環境におけるお金や契約、ハラスメントなど、アートワーカーの制作環境を考える場を設けた。社会問題を議論するために予算と設備が活用されることは、公立劇場の役割として重要である。

自治とは単にみんなで自己決定するのではなく、多様な立場の人が集まり、それぞれが力を与え合うこと、また誰かの力を損なうことなく、より大きな力を生み出して新しい自由を創造していくこと。その際に言葉の

役割は大きい。文化に関する公的な制度は官僚制の文書主義のなかに位置付けられているため、行政の言葉で芸術や劇場について語られる。また、税金が投入されることを市民や観客に理解してもらう際に言葉は重要である。良い作品を市民に届けることはもちろん、劇場に来られない人も含めた多様な人を繋ぐ言葉や表現を支えることが、公立劇場で働く専門家の責任ではないか。

市直営の劇場で市の職員として働いているが、行政のなかに専門家が必要であると考えているにいった。地域の実情をしっかりと聞き取ることができる専門家が複数名いて、地域の人との対話とリサーチに基づいて、制度や仕組みを行政言語で提案できる人が必要である。文化芸術や劇場が専門的だから指定管理として切り離すのではなく、むしろその専門性を行政の内部に位置付け、他の分野と連動させることで、公的文化制度の公共的な役割、つまり地域の自治を支え促進する役割を発揮すべきである。

パネルディスカッション

後半のパネルディスカッションでは自治体直営、指定管理者運営の公立劇場／アートセンターと民間の劇場というそれぞれの立場の違いや役割、課題について話された。

司会の増田愛子氏からは、公立劇場の中には作品を創って社会と繋がるという志をもって運営しているところもあるが、そういった劇場の意義について問いかけられた。その問いに対して、林氏は作品を創ることによる社会との繋がりは大きな意義があると言及しつつ、作品だけでは果たせない公共的な役割もあると指摘した。公立劇場が主催する公演のチケット価格の高さが、社会と繋がるうえでの障壁となる可能性を例に、作品と繋がることのできる人は誰なのか、誰かを置き去りにしていないかといったことを、日々考えながら公立劇場の役割について考えていると述べた。

荒井氏からは、犀の角の活動から劇場の本質に関わる思考について語られた。例えば、やどかりハウスに來ている人達と支援者のやりとりを見ていると、それは演劇としか見えない時があると言い、劇場というものは何かを創りだしたり、価値を転換したりしていくマインドがあれば、いわゆる演劇ではなくとも、新たな価値をどんどん生み出していけるのではないかと考えを共有した。様々な人と関わることで社会と接しながら、そういった人々とどうやって世の中をつくっていくかということを常々考えられるのが劇場なのかもしれないと考えを述べた。

また、公立文化施設が持つ権力について、地域住民と公立施設がどのように対等な関係(例えば、どちらかがどちらかに寄り掛かるのではない関係)が構築されるかという問いには、三富氏がスケートボードの対話の例を挙げ、対話を重ねることで対等な関係のように見えるかもしれないが、権力の構造は施設と市民、両者の思考の根底に根強く残っていると感じていると返答した。林氏は行政職員として立場と権力をどのように使うか明確にしたうえで、色々な人と関係を作るようにしていると、日々の仕事について話された。

質疑応答

最後に、客席からの質疑応答を行った。「専門性」ということの定義や、いま演劇や劇作に感じている変化についてなどの問いが投げかけられた。

なかでも、「自治と芸術の独立性はどのように折り合っていくのか」という問いに三富氏は、「色々なレイヤーやサイズ感のコミュニティのなかでどのように自治というものを実装できるかトライアルを重ね、そのレイヤーが積み重なり、様々なコミュニティの中に大小存在し自治が実践できれば」と考えを語った。林氏からは、小さな場のようなものがたくさん生まれた方が良いのではないかと、様々な人が様々なサイズで集まり、色々な目的をもって話し合ったり作品をつくったりすることが重要ではないかと自治について意見を交わした。

以上をもってシンポジウムは閉会した。

ON-PAM 委員会 2023@YPAM「オープン・ディスカッション」 ラウンドテーブル: Next Producers Meeting 2023 in 横浜

日時	2023年12月13日(水) 11:00~11:45
会場	男女共同参画センター横浜南 フォーラム南太田 大会議室
登壇者	大蔵麻月(theater apartment complex libido:/白昼夢制作) 大川あやの(譜面絵画制作) 河崎正太郎(譜面絵画制作)
ファシリテーター	坂本もも(ON-PAM理事/口ロ制作/範由遊泳プロデューサー/合同会社範由遊泳代表社員/多摩美術大学演劇舞踊デザイン学科非常勤講師)
執筆	白田菜南

※所属、肩書き、団体表記は企画開催時のものを掲載しています。

共創するアートマネージャーとアーティストのための、「Co-Creation Camp(CCC)」。東京と豊岡でのプログラムを経て、本ラウンドテーブルは、CCCに参加した制作者同士が、振り返りと今後のビジョンを話し合う時間として設けられた。登壇者は、大蔵麻月と、大川あやの、河崎正太郎。ファシリテーターは、運営チームである、坂本ももが担当した。

「CCCを経て、チームのあり方や個人の意識に変化はあったか」。冒頭で、坂本が登壇者に投げかけた問いである。白昼夢の制作を務める大蔵は「メンバー同士で対話を重ねる機会に恵まれ、お互いをよく知ることができた。後に実施した公演では、団員の考えや行動を先回りして想像するようになり、自身の役割を明確にできた」と答えた。大川は、「CCC内で、自身の団体(譜面絵画)についてプレゼンテーションを行った経験が役に立っている」という。今後どのようなクリエイションをしていきたいのか。これまで互いが何となく抱えていた共通認識を、しっかりと言葉にでき、

チームで目指している道を捉えやすくなったそう。共に譜面絵画の制作を担う河崎も、「これらの言語化がグランドデザイン(団体活動の長期計画)に活かされている。また、団体内で話し合いをする頻度も増えた」と答えた。

3人とも前向きな変化を口にしていた。だが、譜面絵画では各メンバーの居住地が離れているという理由から、演劇活動を続けることと、生活を維持していくことへのバランスの取り方には、引き続き課題が残るという。例えば、大川は瀬戸内海の島に住んでおり、他のメンバーは関東に住んでいるものの、東京・千葉・埼玉と、それぞれの居住地に若干の距離がある。大蔵は、白昼夢は居住地の問題はないものの、過去の創作活動の経験から、現在は年1回の演劇公演をベースとして生活とのバランスを調整していると話した。それを受けて坂本が、「チーム全員が、少ない公演数であることを納得しているのか」尋ねたところ、大蔵は、団員それぞれの意思を尊重したいので、より広い

活動を行いたい人は、白昼夢の名義で小さなコンテンツを生み出す流れをつくれないうか、その可能性を模索していると答えた。

坂本も同様に、自身の団体においても本公演以外の演劇活動の可能性を考えていると所感を述べたところで、公演形態についての話題がさらに続く。譜面絵画でも小規模の舞台を団体の主流コンテンツのひとつにできないかという話が出ているようだ。また河崎は、このラウンドテーブルを実施しているYPAMのショーケースを例にあげて、このように多方面からアーティストや制作者らが集まる場で、短めのパフォーマンスができることは、様々な新しい出逢いに恵まれるので貴重であると話した。

坂本は、公共劇場による企画性のある「場」づくりが一層必要かもしれないと言及しつつも、団体自身が主体となってコラボレーションを実施する可能性の有無について投げかける。すると3人とも、「周囲でそういった話は出ているが、なかなか実現には至っていない」と、答えが共通した。各々の団体が全力で自走している渦中なので、協働へ移行することへの一歩を踏み出しづらいのだそう。しかし大川は、「団体同士が一緒になって公演をつくることで、事務方が行う膨大な作業をわけあえるのは有難い」とメリットをあげ、「そういった上演方法は、これから増えていくのではないかと」、自身の団体の未来も明るく描きながら嬉しそうに話していた。坂本も、「国際協働では全く知らない劇団同士が一緒に創作することが当たり前だ」と述べ、「国内でも頻繁にコラボレーションが行われるようになったら面白そうですね」と、前向きに応答した。

終わりに近づき、次は、各個人の活動に対するビジョンを語ることに。大蔵は、今は白昼夢の活動を深めていくこと自体が、個人としても取り組みたいことであると話す。大川は、「居住地が離れていることにより現場に行きづらい」という悩みをこぼしながらも、

今の生活環境が気に入っている様子で、「生活とのバランスを取りながら今後も譜面絵画の制作をつづけたい」と、想いを述べた。河崎は、大学卒業後、劇場での勤務を経て退職し、本年度からフリーランスとして働いている。譜面絵画の制作のほか、他団体の公演の当日運営や芸術祭の事務局員としても活動した。自身の団体を運営したいという意志を第一に持ちながらも、他の団体の運営協力等、舞台芸術活動に広く関心があるそうだ。

最後に坂本が、「これらのビジョンを実現していくためには、どう行動していくと良いか、既に実践していることなどはあるか」と、3人に問う。大蔵は、制作の勉強をしたいと周りに言い続けたことで、仕事を得ることができたと過去の経験を話す。すると河崎も、フリーランスで仕事を始めてから、自分が何者で何をしたいかを周囲によく伝えるようにしたことで、それが実を結んでいる気がするかと答えた。大川も2人の発言に深くうなずく。

「今後のキャリアを深めていくにあたり、“やりたいことを積極的に伝えていく”というのは、大切なことですね」と坂本が述べ、本ラウンドテーブルは締めくくられた。参加者それぞれが、CCCでの経験を着実に自分の活動に活かしていることが伝わり、今後の共創を明るく見据えていると感じさせる、充実したディスカッションであった。

舞台芸術の「未来」をのぞむ 連続講座2023

～持続可能な創造環境に向けて

舞台芸術の「未来」をのぞむ連続講座2023

～持続可能な創造環境に向けて

ON-PAMでは「未来」にフォーカスした連続講座を開催いたしました。

以下にその内容をまとめます。また、連続講座の報告書は[こちら](#)からご覧いただけます。

※所属、肩書き、団体表記は企画開催時のものを掲載しています。

第1回 老いと舞台表現

日時 2023年10月23日(月) 19:00～21:30
講師 菅原直樹(「老いと演劇」/ OiBokkeShi主宰)
中島那奈子(ダンス研究者/ ダンスドラマトゥルク)

第2回 舞台芸術と遊び

日時 2023年11月20日(月) 19:00～21:30
講師 尼ヶ崎彬(学習院女子大学名誉教授)
スピーカー 額田大志(作曲家・演出家/ ストミック、東京塩麴 主宰)

第3回 ベイビーシアター

日時 2023年12月18日(月) 19:00～21:30
講師 浅野泰昌(倉敷市立短期大学准教授/ 一般社団法人日本ベイビーシアターネットワーク理事)
スピーカー 弓井茉那(BEBERICA theatre company代表/ 演出・プロデューサー/ 一般社団法人日本ベイビーシアターネットワーク理事)

第4回 脳科学から見た演劇

日時 2024年1月15日(月) 19:00～21:30
講師 田中昌司(上智大学名誉教授/ 工学博士/ 日本声楽発声学会理事)
スピーカー 横山義志(ドラマトゥルク/ 舞台芸術研究)

第5回 アーカイブ～その創造性と未来志向

日時 2024年2月13日(火) 19:00～21:30
講師 吉見俊哉(國學院大学教授/ 東京大学名誉教授)
スピーカー 松延耕資(作曲家・演奏家/ 紙カンパニーproject)

第6回 舞台芸術の公共性と公共圏

日時 2024年3月12日(火) 19:00～21:30
講師 内野儀(学習院女子大学教授)
スピーカー 萩原雄太(演出家/ かもめマシーン 主宰)

執筆者一覽

執筆者一覧



臼田菜南

1999年3月生まれ。大学でシェイクスピア戯曲を学び、卒業後は、舞台業界の広報支援を行う中間支援団体にて、公演宣伝のための記事執筆・SNS運用等を担当。2023年からはフリーランスで、これまで同様、芸術分野の広報業務に加え、舞台制作や、他業界のマーケティングにも携わる。集客のサポートのみならず、新しく舞台芸術にふれる人をふやす“創客”に向けた取り組みをつづけることに関心がある。



鳥井由美子

奈良県出身、沖縄県在住。2012年より関西を拠点に演劇活動をはじめ。「劇団子供鉅人」をはじめ数々の劇団や演劇、ダンス作品に関わる。2018年より沖縄県に拠点を移す。2020年より那覇市の小劇場「わが街の小劇場」の劇場主を先代より引き継ぐ。劇場は2023年に一時閉館し、現在はその活動継続のために準備中。公に共有するために場を開くこと、その環境づくりについて、そして人が集まること（人の意識や興味が向くこと、移動すること）そのものについて考え、活動している。



崎山貴文

1993年生まれ。愛媛県今治市出身。大学卒業後、アートプロジェクトの企画運営会社に所属し、舞台芸術作品の海外公演プロダクションマネジメント・ツアーコーディネート、日本公演プロダクションマネジメントに複数携わる。現在、Web動画制作会社にて営業担当として勤務するかたわら、フリーの制作者として、国内外の演劇作品のプロダクションマネジメントや、アーティスト・制作者向け講座運営アシスタントなどを担当している。



松波春奈

2018年より首都圏でフリーランスの舞台芸術制作者としてキャリアをスタート。身体障がいのあるダンサーを含むダンスカンパニーの運営やツアーマネジメント、関東圏の舞台芸術祭の運営に携わる。2022年より舞台芸術制作者オープンネットワーク、全国公立文化施設協会の事務局として従事。若手制作者が集まる機会「わいわい会」を主催。

ON-PAM ANNUAL REPORT 2023

発行：特定非営利活動法人 舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM)

編集：塚口麻里子、鳥井由美子、山崎奈玲子

編集協力：株式会社ボイズ デザイン：三浦佑介

お問合せ：舞台芸術制作者オープンネットワーク事務局

E-mail info@onpam.net

Website <https://onpam.net>

※所属、団体表記は各企画開催時のものを掲載しています。

©Open Network for Performing Arts Management All Rights Reserved.